

An aerial photograph of a city, likely in Japan, showing a dense grid of residential buildings with colorful roofs. A wide river flows through the city, and a large, open, sandy area is visible in the lower right. A highway runs along the top edge of the image.

春日井市遺跡解説パンフレット

国指定史跡 **二子山古墳**

— 埴輪群像の語る古代史 —

二子山古墳の発掘調査

～埴輪群像の語る古代史 継体天皇・尾張氏をめぐる二子山古墳の被葬者像～

二子山古墳の発掘調査～壮大な埴輪群像～

二子山古墳は、6世紀前葉と推定される墳長94m、盾形の周溝を含む全長116mの前方後円墳です。付近には二子山古墳を含め3基の前方後円墳[白山神社古墳・墳長84m、春日山古墳・墳長72m]と1基の円墳[御旅所古墳・径31m]が現存し、味美古墳群とよびます。

二子山公園の再整備事業に伴う平成4年の発掘調査では、盾形周溝の外側に古墳に平行する幅約4mの溝状遺構を確認し、内部から大量の埴輪や土器(須恵器・土師器)が出土しました。

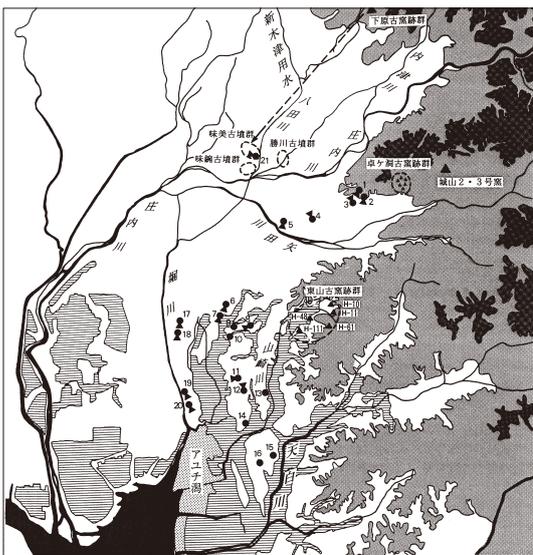
埴輪は大小の円筒埴輪(3突帯4段高さ約70cm・2突帯3段高さ約40cm)のほか、人物(正装男子・巫女・力士・武人など約35点)・馬(飾馬・駄馬8点)・家(6点)・蓋(9点)・盾または盾持ち人(10点)など多様な形象埴輪が確認されています。形象埴輪の総数は、人物を中心として100点を超すものと推定され、盾形周溝と溝状遺構の間に壮大な埴輪群像が復元されます。その様子は、祭殿または豪族の館に想定される家形埴輪を中心として儀礼を司る巫女、参列者(正装男子)、隊列を組む飾馬・武人を配列したものと推定されます。このほか、権威の象徴の蓋や外敵・悪霊等から警護する盾持ち人を要所に配置し、使役用の駄馬(裸馬)・力士は豊穡や鎮魂を意味するとされ、複数の儀礼の場面を再現していた可能性があります。

継体天皇・尾張氏をめぐる二子山古墳の被葬者像

5～6世紀にかけては、武烈天皇の後、皇位継承揺籃期に相当し、尾張は、河内・近江・越前・美濃などとともに大伴金村らによる継体天皇擁立に協力した地域の一つとされます。文献によると、尾張連草香の娘目子媛めのこひめが天皇妃となり、後に二人の皇子が安閑・宣化として皇位を継承したと記し、尾張氏は天皇の外戚として飛躍的に勢力を拡大したと推定されます。

継体天皇と地域豪族の連携は、真陵とされる今城塚古墳(墳長190m・大阪府高槻市)と共通する墳丘規格からも認められ、尾張地域では断夫山古墳(墳長150m)が約8割、二子山古墳(墳長94m)が約5割の規模に相当します。断夫山古墳は6世紀代では東日本最大規模を誇り、卓越した規模や文献記録、熱田に所在する立地などから、尾張氏所縁の古墳とする考えが有力です。二子山古墳は、同時期(6世紀代)において断夫山古墳に次ぐ尾張地域第2の規模を誇り、後の春日部郡または尾張北部を支配下に治めた豪族の墓と推定されます。尾張氏は二子山古墳をはじめとする味美古墳群の勢力と連携することで実質的な尾張地域の統合を達成し、勢力拡大の礎を築いたと推定されます。

今城塚古墳では二重周溝の内堤に壮大な埴輪群像が確認されており、類似する埴輪の在り方は、継体天皇・尾張氏との関係を含めた二子山古墳の被葬者像を読み解く上でも重要な要素といえ、古墳と埴輪が古代史の謎を解く重要な鍵となります。

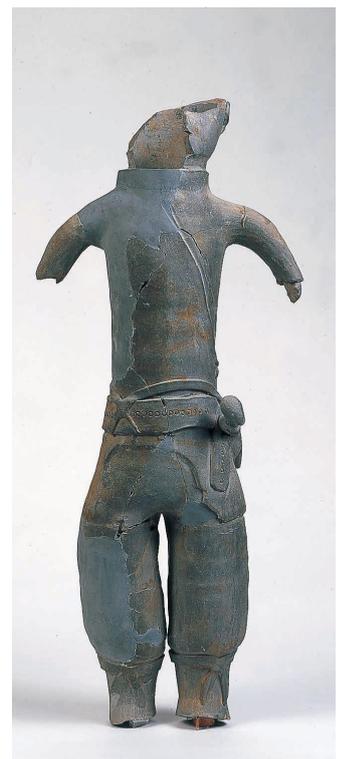


- 1 茶臼山古墳 2 池下古墳 3 長塚古墳 4 鳳鏡山古墳 5 守山白山神社古墳
- 6 白山神社古墳 7 西塚古墳 8 馬走塚古墳 9 一本松古墳 10 八幡山古墳
- 11 八高古墳 12 高田古墳 13 おとり山古墳 14 おつくり山古墳 15 鳥籠八剎社古墳
- 16 桜神神社古墳 17 那古野古墳 18 大須二子山古墳 19 断夫山古墳 20 白鳥古墳
- 21 味美二子山古墳

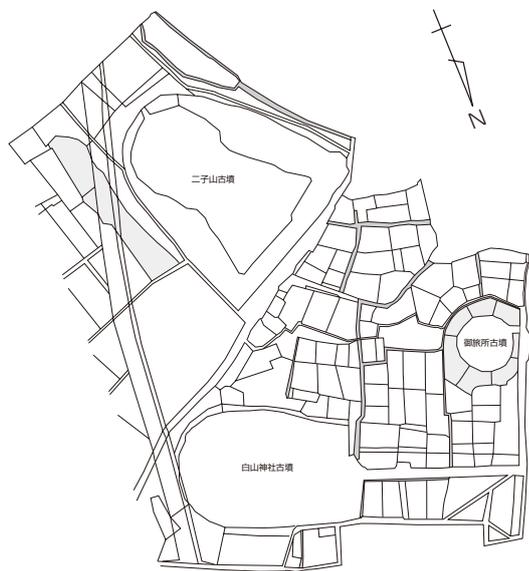
5～6世紀代における名古屋台地上の古墳と古窯



馬形埴輪



人物埴輪



明治21年地籍図



溝状遺構の機能と周溝の形態

- ・平面図によると、溝状遺構は墳丘を挟んで対称形と推定されますが、前方部側が外広がりの弧を描くことから、古墳の周りを全周する「二重周溝」となる可能性は低いと考えられます。溝内から出土した大量の埴輪や土器からは、付近に形象埴輪を主体とする埴輪群像や供献土器等による祭祀空間が想定され、溝状遺構の性格・機能としては盾形周溝との間幅約10mの空間を区画する「区画溝」であったと推定されます。
- ・二子山古墳に先行する白山神社古墳の周溝は、馬の蹄のような馬蹄形で、明治21年の地籍図にもその形態が確認でき、発掘調査によっても前方部の隅に向かって周溝の幅が狭まることを確認しています。古墳の設計規格の変化や古墳祭祀の変化は、ヤマト王権をはじめ、時の豪族間の連携・地域間の関係を色濃く反映したものと推定されます。

墓前祭祀と須恵器

溝状遺構から出土した須恵器には食物を盛る食器(蓋坏・高坏・脚付四連坏)、液体などを入れる容器(広口壺・有蓋脚付壺・^{はそ}罎・提瓶・甕)のほか、底の丸い壺を載せる台(高坏形器台)があります。脚付四連坏は蓋坏4点を器台の上に載せて一体化したもので、有蓋脚付壺は小型の壺形つまみの蓋を有する丸底の壺に台(脚部)を付けたもので、いずれも装飾性が高く、祭祀(マツリ)の専用品と考えられる特殊な形です。

祭祀の実態としては、煮炊き用の土師器(台付甕)が伴うことから、須恵器は調理した食物を亡き古墳の主(被葬者)へ供える食物供献またはマツリの参列者たちが共食(墓前での飲食行為)をするために使用したと推定されます。溝内から出土した土器は、壺の口(口縁部)や高坏の脚部など特定部位を打ち欠く、または全体が細かく破碎されており、使用不可能な状態を意図して投棄したものと考えられます。墓前での祭祀に使用した土器を破碎する行為は、古墳(=あの世・非日常的空間)と日常を区別する生死観、またはケガレを払うなどの意識の表れと推定されます。



溝状遺構遺物出土状況



人物埴輪出土状況



馬形埴輪出土状況

二子山古墳出土埴輪の技術的特徴と工人像

～二子山古墳と下原古窯跡群の需給関係～

二子山古墳から出土した埴輪は、窯を利用して灰色・硬質に焼き上げたものを多く含み、数量的に大部分を占める円筒埴輪は轆轤による調整痕跡(回転横ハケ・ナデ)を有し、形態や規模などの規格性が強い点が特徴です。窯焼成や轆轤成形は須恵器の代表的な製作技法であり、轆轤成形は人物の胴や蓋など、形象埴輪の製作工程にも部分的に応用されています。形象埴輪では人物の身体や衣服・器物など、立体的に粘土を貼り付けた細部にわたる写実的な表現のほか、馬などの大形かつ複雑な形に応じた特別な成形手順が認められます。



円筒埴輪



円筒埴輪各種



人物埴輪内面の回転ナデ調整

須恵器との製作技法の類似性は、埴輪生産への須恵器工人の関与を示すものと推定されます。須恵器の製作技法を応用して製作された埴輪を須恵器系埴輪、須恵器窯で埴輪を焼成する生産体制を須恵器・埴輪併焼窯とよび、全国的にみても尾張地域をはじめとする地域性の強い特徴とされます。尾張地域では東山窯・下原古窯等が須恵器・埴輪併焼窯として確認されており、二子山古墳への供給窯として下原古窯が想定されます。

二子山古墳のような大規模な古墳では、必要とする埴輪は千点以上に及んだと推定されます。また、尾張地域では5世紀後半から6世紀前半頃にかけて古墳築造の最盛期を迎え、大規模な前方後円墳のほか、中小規模の円墳などにも埴輪祭祀が拡大しています。

須恵器は、従来の土器に比べて轆轤成形や窯焼成により大量生産が可能であるため、須恵器生産と埴輪生産が融合した歴史的背景には、需要の急増があったと推定されます。二子山古墳からは高温で焼き歪んだ円筒埴輪が一定量出土しており、数合わせともいえる規格外の埴輪の存在は、大量の需要を満たすための過密な生産状況を反映したものと推定されます。



焼き歪み円筒埴輪



馬形埴輪頭部内面



馬形埴輪背部内面



人物埴輪 頭部



人物埴輪 指先



下原古窯跡群出土人物埴輪 頭部



下原古窯跡群出土人物埴輪 指先

人物埴輪にみる量産化と写実的表現手法

～須恵器工人在製作した形象埴輪～

人物埴輪(右上の正装男子ほか)は、灰色・硬質に焼き上がり、形態上は胴長寸胴で、短い腕とのバランスを欠く一方、小鼻や指先の爪などの身体的な特徴や縫い目・重ね着を再現した衣服、飾大刀など器物の細部にわたる写実的な表現が特徴的です。

見た目の写実性以外に、粘土を立体的に交差して貼り付けることで、着衣や大刀・腰帯などの着装的順序そのものを再現したと推定されます。一方、胴部を扁平ではなく筒状(寸胴)とすることで、製作工程に轆轤成形を応用し、規格化・量産化を図ったものと推定されます。また、胴長な形態は、埴輪の視覚的要素として、最も効果的に高く大きくみせるための工夫とも推定されます。形象埴輪における須恵器製作技法の応用や熟練した表現手法から、二子山古墳への埴輪供給に際しては、須恵器工人在埴輪生産全般に関与したことを示唆しています。

二子山古墳と下原古窯の需給関係

二子山古墳と下原古窯の需給関係は、須恵器の製作技法を応用した須恵器系埴輪という基本的な製作技法上の共通性のほか、円筒埴輪ではヘラ記号や口縁部等の形態上の一致が挙げられます。形象埴輪では、人物の衣服・器物や馬具などにみられる写実的な意匠表現の類似性や、人物の手首や水鳥の頭部の先端をソケット状に成形し、腕・頸部へ挿入する特徴的な接手法が認められます。

考古学的な見解以外では、胎土(粘土の成分)の理化学的な分析からも一致する資料が確認されています。



人物埴輪(正装男子)腰帯付近拡大



馬形埴輪・馬具(鏡板)



馬形埴輪・馬具(雲珠)



下原古窯跡群出土馬形埴輪・馬具



水鳥形埴輪 頭部



下原古窯跡群出土水鳥形埴輪 頭部

下原古窯跡群の発掘調査

～明らかになった二子山古墳への須恵器・埴輪供給窯～

下原古窯は、春日井市東山町字平橋地内に所在し、丘陵の北向き斜面の中腹、標高約50～60mに立地しています。昭和36年に『春日井市史』編さんのため2号窯の発掘調査が実施され、その後、平成元年から2年にかけて1～3・6～8号窯と約40m四方に広がる灰原が確認されました。6世紀前半(1～3・6号窯)を中心に、7～8世紀代(7・8号窯)にかけて断続的に操業し、天井の一部が残存する3号窯をはじめ、窯体の保存状態は全国的にみても極めて良好といえます。発掘調査後は現地保存され、平成15年に市の史跡に指定されています。

下原第3号窯は、丘陵斜面を約30度の急角度でトンネル状に掘り抜いて築いた最大幅1.8m、全長約12mと推定される長

大な^{あながま}窯(登窯の一種)です。

発掘調査では灰原を中心に大量の須恵器・埴輪が出土しており、6世紀前半代は須恵器・埴輪併焼窯として、須恵器以外に古墳への埴輪の供給を担ったと推定されます。須恵器は食器に相当する供膳具として坏・高坏・器台、貯蔵具として各種の壺類(甗・広口壺・短頸壺など)・甕、調理具として甑・鍋、そのほか錘など、埴輪は円筒埴輪が最も多く、朝顔形埴輪・壺形埴輪のほか、人物・馬・蓋・盾・家などの形象埴輪が確認されています。

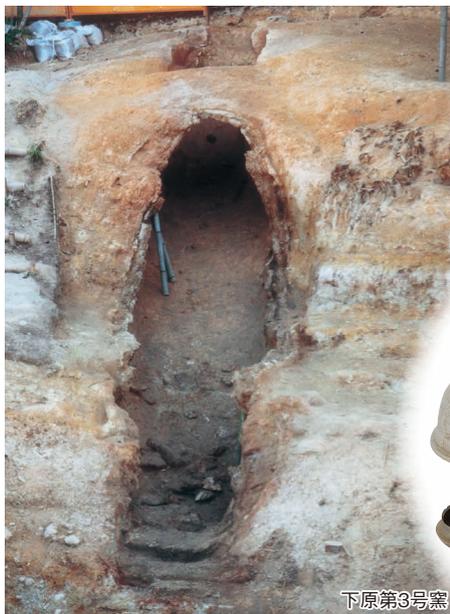
主要な供給先と想定される二子山古墳は、下原古窯から直線距離にして約8kmに位置し、両遺跡の間には現在、生地川・八田川が流れています。古墳時代当時も同様な流れが存在したと推定され、馬形埴輪など数十kg以上に及ぶ重量物や千点以上必要とされた円筒埴輪などを安全かつ大量に運搬するため、河川による水運を利用した可能性が想定されます。



下原古窯跡群第3次調査



下原第2号窯



下原第3号窯



下原古窯跡群出土円筒埴輪



下原古窯跡群出土須恵器

須恵器は、4世紀末または5世紀はじめ頃に朝鮮半島から伝わり、従来の褐色・軟質の土器とは異なる灰色・硬質の焼き物です。轆轤成形による均整の採れた形態や窑窯(登り窯の一種)を用いて1,150度を超す高温の還元炎焼成を行っており、釉薬の使用を除き、今日の陶器の原形ともいえる特徴と技術を既に備えています。



土器の変遷



須恵器系埴輪の製作イメージ

文化財を守り、伝える ～二子山公園の整備とハニワまつり～

二子山古墳は、墳丘や周溝が良好な形で残っており、昭和11年12月16日付けで国の史跡に指定されています。昭和30～40年代の区画整理事業に伴い「二子山公園」内に取り込む形で保存が図られ、その後、「ハニワの館」や園庭を整備して平成8年度にリニューアルオープンし、市民の憩いの場となっています。

ハニワまつりは、埴輪の需給関係で結ばれた二子山古墳・下原古窯を普及啓発するイベントとして平成3年に始まり、平成9年・第7回以降は二子山公園を会場として、毎年市民が制作した約100体のハニワを野焼きしています。復元ハニワは、二子山古墳と下原古窯の間、生地川・八田川沿いに整備された「ふれあい緑道」に並べ、埴輪の供給ルートで結ばれた古代の情景を「ハニワ道」として再現しています。



「ハニワの館」は、円墳をイメージした円形ドーム形の展示兼休憩施設です。二子山古墳の発掘調査についての解説パネルのほか、出土した馬形埴輪・円筒埴輪・須恵器の一部が展示されています。園内には憩いの場として芝生広場や園池、園路が整備され、古墳散策を楽しむことができます。

ハニワの館 開館時間 9:00～17:00
休館日 月曜日(祝日の場合はその直後の休日でない日)
年未年始

復元ハニワは、全国各地の古墳から出土した埴輪をモデルとして可能な限り忠実に制作します。約1か月間乾燥させた後、耐火レンガを積み上げて簡易の窯を築き、薪を燃料として一昼夜かけて焼き上げます。焼き上がったハニワは、粘土の肌色から褐色へと色合いが変化しています。



二子山古墳位置図

愛知県指定史跡 白山神社古墳・御旅所古墳

白山神社古墳は墳長84mの前方後円墳、御旅所古墳は直径31mの円墳です。白山神社古墳は平成19年に発掘調査を実施し、後円部・前方部の中段平坦面において埴輪列を確認しています。全形の判明した円筒埴輪は2突帯3段の形態で、高さ47.5cmと38cmの大小があります。くびれ部からは形象埴輪の破片が出土しており、人物・家の可能性があります。

御旅所古墳は周囲の土留め工事の際に埴輪列の一部が露出し、円筒埴輪・形象埴輪・須恵器が出土しています。円筒埴輪は3突帯4段の形態で、高さは70cm前後と推定されます。古墳の年代は2基とも5世紀末葉から6世紀初頭に位置付けられ、埴輪の特徴から白山神社古墳⇒御旅所古墳の築造順序と推定されます。御旅所古墳は円墳でありながら後の二子山古墳の円筒埴輪に類する形態と技術的特徴が認められ、古墳の系譜上の問題や埴輪の生産体制と技術的な変遷をうかがう上でも重要です。



白山神社古墳出土円筒埴輪



白山神社古墳前方部中段平坦面埴輪列



御旅所古墳埴輪列



御旅所古墳出土円筒埴輪・基底部



御旅所古墳出土高坏形器台・脚部



白山神社古墳前方部中段平坦面埴輪列 (拡大)

春日井市遺跡解説パンフレット
国指定史跡 二子山古墳
— 埴輪群像の語る古代史 —

編集 春日井市教育委員会
発行 平成27(2015)年3月31日
印刷 木野瀬印刷株式会社



このパンフレットは、文化庁「地域の特性を活かした史跡等総合活用支援推進事業」により作成しています。